

心臓カテーテル検査についてのご説明

心臓カテーテル検査とは

心臓の部屋（心房や心室）や心臓を養っている血管（冠動脈）に、柔らかい細い管（カテーテル）をX線透視下で挿入し、内圧を計測したり、造影剤を用いて撮影したりする検査です。この検査は心臓病の正確な診断と治療方針の決定のために、とても重要な検査です。また、必要に応じて大動脈やその他の動脈や静脈を撮影することもあります。

検査のすすめかた

1. あらかじめ病室で、穿刺部位と反対側の腕から点滴を始めておきます。
2. 専用のカテーテル検査室に入室し、まず穿刺部位を消毒します。穿刺部位には手首、肘、鼠径部、頸部等がありますが、どこから行うかは疾患によって異なります。
3. 清潔な覆いをかけた後、局所麻酔を行います。
4. 麻酔が効いたらカテーテルを挿入します。カテーテルの先端を適宜操作し、圧を測定したり、少量の血液を採取したり、造影剤を注入するなどして検査を進めます。
5. 検査が終わりましたら、カテーテルを抜き、穿刺部を器具で圧迫して血を止めながら病室に戻ります。動脈から検査を行った場合には、この止血に数時間かかります。その間はその場所をむやみに動かさないよう御協力ください。

検査の合併症

1. 検査終了後の止血時に圧迫による痛みやしびれが起こることがあります。これは通常圧迫を中止すると時間とともに改善します。また、鼠径部から検査を行った場合には長時間の仰臥位による腰痛が起こることがあります。
2. きわめてまれに次の合併症が起こることがあります。
死亡、心筋梗塞、脳梗塞、穿刺部位の障害（血腫、閉塞、動静脈瘻、仮性動脈瘤、検査後時間が経過してからの再出血、など）、不整脈、心臓や血管の障害や穿孔、発熱や感染、造影剤などに対するアレルギー反応、腎臓障害、血圧低下、など。
3. これらのうち次のは、検査が終わり帰宅されて後日初めて発見される可能性があります。
穿刺部位の障害（閉塞、動静脈瘻、仮性動脈瘤、再出血、など）、造影剤などに対するアレルギー反応、腎臓の障害、など。特に造影剤の副作用につきましては、別紙「造影剤検査をお受けになる患者様へ」を必ず御覧ください。

検査を受けない場合の予後と危険性

確定診断が得られませんので、病気の有無や重症度が不明となり、最適な治療方針を決定できません。また、狭心症の悪化、心筋梗塞による死亡、突然死、心不全の悪化、心不全死などの可能性があります。